

日本貿易振興機構(ジェトロ富山)・未来観光戦略会議

観光と物流 V.I.Tフォーラム

『ロシアとの観光・物流・産業振興を通じたまちの創り方』

【講演】

①発展するロシア：日本との交流拡大の可能性

株式会社マルナカインターナショナル 代表取締役 中尾 千恵子 氏

私どもの会社は設立して33年、1994年からロシアビジネスを行っている。この15年間、モスクワは世界一ではないかと思うほどに変貌を遂げた。最も変化を感じたことはロシア人の表情であろう。本当に表情が豊かになった。

弊社の業務内容は3本あり、1つめは日系企業が駐在事務所、現地法人をロシアに作る場合、会社が稼動するまでの法律的な手続きを全部サポートしている。2つめは、2000年から日本の高級スキンケア商品をロシアに輸出しており、向こうに現地法人を作りそこが輸入元となり販売卸もやっている。最初、モスクワとペテルブルグが中心であったが、今は地方都市へも販路が広がり売れるようになってきている。3つめはロシア企業と日本企業のマッチングなどの企画や市場調査を請け負った活動をしている。

印象に残る仕事として、モスクワにある国際デザイン学校から依頼があった日本への視察旅行である。卒業生を中心として、日本のデザインなどを学ぶ企画であった。南アルプス奥地、西山温泉のある高級日本旅館に行った際、山の中に立派な日本建築の旅館があることにロシア客は驚いていた。最も驚いたのは温泉や和室でもなく仲居さんのサービスであった。この旅行にロシア客は感動し印象に残ったようで、今でも口コミでリクエストをもらっている。

富山県に来たのは今回が初めてであるが、富山は観光の宝庫ではないかと思う。特にモスクワのロシア客を呼ぶという点で非常に可能性があると思う。モスクワで働いているビジネスマンは非常に疲れている。彼らは、ビジネスの世界でわずか10数年間で駆け上がり、今では企業の経営者や幹部になっているが、今後どうなるか不安もあるし競争も激しい。そういうストレスを抱えて働いているため、彼らは休暇のときに大都会や観光地で過ごしたいとは思っていないのだ。精神的にリラックスできる場所でゆっくりしたいという思いを非常に感じるし、モスクワでは今ヨガが静かなブームとなっている。

モスクワのビジネスマンは来日経験があり、既に京都、箱根、熱海は訪れたが、今度は日本海側に行き日本海を見てみたいというリクエストを4～5年前から聞く。こういうことからチャンスがある。

大学卒で少し語学ができ夫婦で共働きの人たちの年収というのは、600～700万円程度以上あり、こうした世帯数は少なく見積もっても、10万以上、20万近くはいるはず。これらのモスクワのアップミドルは観光客としてのターゲットになると思う。やはり、ターゲットをきちっと絞ることは効果的なことではないかと思う。

では、こういう方々にいかに富山の情報を知ら

せるかということだが、提案するのは、モスクワで年に一回開催されている「観光国際見本市」において、小さいブースでも借り切って富山県を前面に出し徹底的に紹介したらどうか。ただブースを出すだけではなく、関係者を呼んで夜でもレセプションを開くなどすればよいのではないか。

また、例えばアエロフロートの機内誌や、ロシアのビジネスマンがよく読む経済雑誌「コメルサント」や「エキスパート」などの雑誌の記者、編集者、カメラマンを富山に招待し、雑誌に5～6ページの特集記事を書いてもらう。これは雑誌に広告費を払い掲載するよりも非常に効果があり信頼度も高い。

その他、富山県でも紹介する様々なコースがあ

ると思うが、3つ、4つではなく20～30のコースをどんどん個別に作り上げていく。コース数がたくさんあればあるほど、その中から自分で選択したという「贅沢感」を感じさせる。それは非常に重要なこと。

それから、例えば今回アカデミー賞を受賞した映画「おくりびと」の滝田監督は高岡の出身とお聞きしたが、そういった情報も広報活動の中に織り込むことも非常に大切ではないか。滝田監督はアメリカやヨーロッパでの話題を通じてロシアの方にも情報が入ってくるはず。アッパーミドルは、知的好奇心が高く何か新しい情報を得て今後の仕事やアイデアに生かしたい思いを潜在的に持っている。

②ロシア(沿海州)からみた日本(富山県)と今後の関係

在新潟ロシア総領事 クラコフ・ワシーリー・フセヴォロドヴィチ 氏

富山県と高岡市には大仏や瑞龍寺など非常に優れた文化遺産があり、観光の面で京都に負けないくらいの高い可能性を持っている。ロシアでは日本文化ブームになっているので非常に可能性は大きい。

現在は金融危機の影響で、ロシア経済にも悪い面が出ている。例えば世界一の株価の下落率。1カ月のうちに株価が71.9%下がった。ロシアの経済は非常に大きな打撃を受けているし、観光面でも数字上で悪影響は出ている。

今後観光の可能性のためには、PRキャンペーンが必要である。現在は地元で誇り得るようなものが全くPRされていない。例えば、鎌倉や奈良にしかないような大仏が高岡にはある。ロシアではそれらに対して非常に人気があるにもかかわらず、情報が全く来ないというのはPRが足りないのではないか。

観光に対してもう一つネックになっているのは、最近実施しているウラジオストク航空の料金制

度。高すぎて人があまり乗らなくなった。私も総領事の立場から何とか改善しようと努力しているが、日本でも新たな航空会社の設立やリースで飛行機を借りるなど検討してほしい。

新潟総領事館の管轄区域は、日本海沿いに秋田から福井までであるが、違いはあるものの各地には共通点がある印象を受ける。風土や産業や各分野で類似点がある。どの県も全く同じ問題を抱えている。力や資金をどこかで集中し共同でできないか。各県単独でやり始めてはいるが、連絡会議や日本海沿いで自治会などの必要性を感じている。従って、PRキャンペーンも高岡だけではなく共同で魅力をアピールしていき、その中で各所の特色を生かしてやればよい。

経済は現在妨げとなっているテーマ。富山は中古車と丸太で一番大きい打撃を受けている。中古車は様々な問題があるが一つはレートの問題。ルーブル安で円高となり価格が倍となった。また関税が上がった影響が大きいと言われているが、

上がったのはたった10%だけで重要な影響は与えていない。丸太についても85%の高関税を付けるのであれば、業者が急に打撃を受けないよう段階的に配慮すべきである。今は金融危機で日本も難問があるしそれはロシアも同じ。そういう苦しいときにこそ、お互いに何か協力をする必要がある。

ものづくりは、日本は特に優れておりその産業をいかに生かせばいいのか。大量生産を繰り返すのは限度ではないか。今後、輸出産業も大事だが最も輸出すればいいと思うのは日本のテクノ

ロジー。つまり日本のものづくりの熟練者などノウハウを持っている人たちを隣国であるロシアに移転する時期ではないか。日本では優秀なエンジニアや熟練工でも失業者がいるはず。例えばその人たちを集め、ロシアで自動車や製材などトレーニングセンターのようなものを創設してはどうか。全く逆の発想でいろいろな可能性を見つければ、必ず私たちの関係はまた金融危機を乗り越えて改善するだろうと確信している。

③世界同時不況のなかで富山県の国際観光について考えること

富山県理事(観光・地域振興局、知事政策室担当) 廣光 俊昭 氏

まず不況と観光の関係について整理すると、全国的状況だが、最近の訪日外国人の動向は、90年の頃は300万人台だったが、以降ずっと伸びており、08年の段階で835万人に伸びている。年率換算すると5.4%の伸びだが、日本経済はこの期間ほとんど成長していない。その中で、5.4%成長した産業は他にないのではないか。非常に活力あるセクターである。ただ、世界同時不況で08年では、微増にとどまっており、直近の12月だと前年比で約20%落ちている。

世界不況と言っているが、日本の状況が一番よくない。ここ数年の円安を追い風にして多くの外国人が訪日したが、ここ半年は円高の状況である。そう考えると、国際観光の視点で、まちづくり、県づくりを期待していいのか疑問があるがそうではない。

私の所属する観光・地域振興局では、今後定住人口が減っていくため、交流人口を増やして県の経済を活発にしていこうという目的で事業を実施している。富山県では今生まれた子供が20歳になったころ、大体1割くらい人口が減るペースである。人口減少に加え高齢者比率が高まっている状況であり、今は2.7人くらいの若い人で高齢者

を支えているが、それが1.5人となり、県としても観光に期待する必要があるのではないか。

次に、国際観光の大きな可能性として、日本人の人口約1.3億弱に対し年間約2,000万人が外国に行っており割合は2割弱であるが、外国旅行に行っていない国がまだかなりある。例えばタイはまだ7~8%、ロシアもまだ6%ぐらいの国民しか年間に海外旅行をしていない。インドネシア、さらには中国である。中国は13.3億人に対し海外旅行者は1.4%と低い。国際観光は現在経済が落ち込んでいるが中長期的に見れば大きな可能性がある。国土交通省によると、国際観光の経済効果は国内旅行者に比べ大きな経済効果がある。同省の試算だと、外国旅行者7名で国内日帰り旅行者の77人分に相当する。

本県では最近外国からかなり来ていただいている。平成15年に比べると、本県の場合は2.9万人から10.6万人、3.7倍(全国約1.6倍)増加している。最近本県でこれだけ伸びている産業はないのでは。

県内観光をもう少し細かく見ると台湾、韓国、中国をはじめとしたアジア地域への依存度がやや高い。特に台湾は非常に高く約43%(全国16%)を占めている。欧米はまだまだ少なく7%しか富

山県に来ていない（全国は22%）。統計上ロシア人は富山県にかなり来ているが、ビジネス利用客がほとんどで、折角来ていただいても、観光していただける方がまだ少なくこの点が課題だと考えている。金沢や高山など近隣都市では、欧米、ロシアからの訪日客は相当の存在感を持っている。

そこで県の観光振興に向けての取り組みであるが、一つは観光戦略プランを策定し今秋頃までに最終的な計画を作る。またロシア関連の観光懇話会を創っており、欧米、ロシア、東南アジアの新規市場開拓に向けての課題を整理している。

その他の取り組みとして、①富山らしい魅力の創出として、具体的には富岩運河周辺、射水市内川周辺、高岡市での水辺を生かしたまちづくりなどを応援する、②質の高い旅行ニーズへの対応として、富裕層が来て楽しめるような観光地を県内にも創る。そのための戦略的なPRとして山の手線の車体広告をやっていく、③おもてなし環境の整備として、アドバイザーを招き、徹底的に観光地や宿泊施設を指導してもらう、④国際観光と

して、まず東アジアから来ている観光客にリピーターになってもらう。

最近の県内の観光に関する話題だが、ミシュラン日本版で五箇山が三ツ星に格付けされた。今後は、五箇山と、例えば高岡を一緒に組み合わせて突破口にし、富山県全体を売っていききたい。

また、日経新聞社のリサーチ会社がインターネットで調査した「どこの観光地に行ったときに満足しましたか」という調査結果では、上位1番から7番までは、沖縄の観光地と富山県の観光地が載っていた。立山、北アルプス、五箇山であり、富山県の観光地は大変評価されている。

18万人都市で、高岡のように資源がある都市は全国的にも他にはないのではないかと。国宝の瑞龍寺、勝興寺、古城公園、市美術館でのユニークな展覧会の取り組みやアカデミー賞という新たな話題も加わった。ぜひこういった資源を有機的に組み合わせ、県としても高岡市と一緒に国際観光に取り組んでいきたい。

④ロシアと高岡市の交流の拡大に向けて

高岡市長 橋 慶一郎 氏

「逆さ地図（環日本海諸国図）」からあるように、過去からずっと環日本海地域同士の交流というのは続いてきた。今大変な不景気に直面し、大きな変化の波にあるが、よく考えると長い歴史の中でこれまでも様々な山谷越えながらやってきたので、距離が近い地理的な関係を生かしながら、その時々状況の中でさらに前進させていく必要があるのではないか。

歴史的なことを振り返ると、今から1200年前の810年に、伏木に日本初の外国語学校、渤海語の学校が設立された記事が書物に残っている。渤海というのは当時の北朝鮮からロシアの沿海州にかけての地域を治めていた国であり、ウラジオスト

クも渤海の一部であった。そこから船でやってきた使節を、12回も北陸、能登の福浦など各所で受け入れていた。1200年前から対岸の言葉を学ぼうという気持ちがあったといえる。

また、今から110年前の1899年、藤井能三という伏木のまちづくりに献身的に努力され、伏木に灯台や小学校、伏木の港を近代港湾に変えた重要な人物がいたが、彼は伏木を貿易港にするために一生懸命努力し、それが1899年の伏木開港に繋がっていった。北前船で盛んだった港が、鉄道の発達に従い国内物流だけでは生きていけなくなり、今後は対岸にあるウラジオストクとの間で交易しようという思いで伏木の港を開いたのであり、

3 TOP NEWS

110年前もこの富山の方々は同じことを考えながら、対岸との貿易に活路を見出そうとしたのである。そして開港され、伏木は大いに外航船の出入りで活況を呈するという事になった。

1930年代、ウラジオストクと伏木港、そして朝鮮半島の様々な港を結ぶ定期貨客船が往来する。ウラジオには日本人街が発展し、1920年頃には6,000人近い日本人が住んでいた記録も残っている。

戦後になると、シベリアに豊富にある木材資源、北洋材を富山県、日本に輸入することが大変盛んになってきた。北洋材やカニやシャケなどの漁業資源、そして高岡はアルミの産地であり、ロシアにも大きなボーキサイトからアルミを精錬する工場がある。これはコムソモルスク・ナ・アムールにあるが、アルミ地金、アルミ、北洋材、水産物などを富山県は輸入し、逆に工業県である富山県はものづくりで製造した化学製品や重工業品を極東へ輸出することで日ソ間の定期航路が1975年から開設している。さらに16年前の1993年にルーシー号の前身であるアントニーナ・ネジダノーフという客船による航路が始まった。

現状での輸入先は、オーストラリア、インド、ロシア、中国である。伏木港でも石油関係の輸入があるし塩や米など様々なものが伏木港へ入ってくるが、ロシアからの輸入はアルミ地金や北洋材や少量だがホウ酸がある。

輸出は中古車が09年1月、2月は激減しているが、平成初めから今日まで中古車は非常に大きな輸出品目であった。船舶ではロシア船が入港のうち3分の1を占める。客船の定期航路、貨物の定期航路、富山新港とポストーチヌイ関係では定期コンテナ航路が運行している。

高岡市の取り組みでは、周辺日本海側沿岸の市長たちが集い、ロシアの沿海州地方、内陸のバイカル湖周辺の極東ロシアの市長方と様々な意見交換・交流する日露沿岸市長会を双方で昭和45年から続けている。2～3年に一度、会場を両国間で換えながら、交流を進めている。今年の8月には

函館で同会議を予定しており、一層の交流の促進を図りたい。

極東地域は、非常に天然資源に恵まれていることも含め、これまで順調に成長が進んできている。サハリンでも油田開発や、天然ガス利用などの話があるし、ウラジオストクも、非常にダイナミックに発展を続けている。今の大きな物流としては中古車であるが、やがて新車に替わってくるのではないかと。

そして、相互交流の中で東海北陸自動車道全線開通があり、日本のものづくりの拠点である名古屋、中京地域の後背地をしっかりと持ちながら、今後は伏木富山港としてロシアを含めた対岸との近さという地の利を生かした貿易に入っていく必要がある。名古屋から東海北陸自動車道で富山新港、伏木港まで概ね3時間半から4時間でいく。もし名古屋からウラジオに直接行くとすれば、東京を経由し津軽海峡を渡る必要があり、1～2日のロスが出てくる。そう考えれば、この対岸と伏木・富山新港との間に非常にサービスが良い航路が確立すれば、当然こちらを利用した方が岐阜県、三重県、愛知県、静岡県にとってよいのではないかと。その代わり富山県の様々な荷物を名古屋港からアメリカをはじめ欧米へ持って行くことが理にかなっているのではなからうか。そういった物の流れ、そして観光資源を生かした人の流れ、そこに語学等を研修した若い人材の活用となってくれば真の環日本海交流圏が出来てくるのではないかと期待している。

